

提案論文 1.

生涯発達論の展開

—たとえば、対人関係の発達の場合—

聖心女子大学 高橋 恵子

生涯発達論は発達についての考え方に変更を迫るものである。この小論では、初めに、ようやく“欧米流硬派”の発達心理学においても市民権を得るようになった生涯発達論がこれまでの発達のストーリーのどの点を変えることになるのかについて述べる。そして、より具体的にはどのような変化がおきつつあるかについて、対人関係の研究を例にとり検討する。そして最後に、そのような発達のストーリーの変更が教育にどのような示唆を与えているかを考える。

1. 生涯発達論に拠る発達

(1) 生涯発達心理学とは

生涯発達論に立つ生涯発達心理学 (life-span developmental psychology) とは「人間の一生涯を見通しながら発達を考える」という視点を重視する心理学である。人の誕生から死に至るまでの一生を視野に入れて、発達の問題を考えることを大切にすべきだという主張に、その特徴があるといつてよい。

生涯発達心理学とは、しばしば誤って用いられるのだが、単に、誕生から高齢に至るまでのそれぞれの時期の記述を寄せ集めただけのものではない。生涯にわたる発達についての展望を持つことが大切で、それなくしては、たとえ同じ測定具を用いて年齢の異なるさまざまな被験者にしてきたからといって、生涯発達心理学にはならない。筋もなくデータを寄せ集めても生涯にわたる発達はみえてこない。したがって、生涯発達心理学を志す人がすべての時期を網羅した研究をする必要もない。たとえば、乳児を研究していても生涯発達の視点を重視していれば、それは生涯発達心理学というべきである。つまり、生涯発達の視点を持つということは、特定の時期だけを切り取り、その時期に顕著な問題だけを将来の展望なく扱う立場と対立するものである。

Bühler, C. や Erikson, E. H. などの小数の先駆者はいたものの、データを伴うかたちでの現在のよような生涯発達心理学を定着させてきたのは20余年に及ぶ Baltes, P. B. の努力であり、中高年を研究してきた研究者の仕事があればこそといえるであろう（これについては、高橋, 1990で詳しく述べた）。

長い間心理学者の多くは、主として幼児と青年のデータをもとに人間の発達の全ストーリーを書いてきた。教科書でよくみる成長曲線のとおりである。無能で生まれ、その後発達はするものの青年期をピークにして衰退していくというものである。1960年頃から活発になされた乳児研究は乳児の有能さを示し、能動的な生き物であることを示して人間観の修正をしたが、さらに人間観の変更をせまったのは、Baltes らの中高年の心理学であったと思われる。中高年の心理学の貢献によって、発達心理学は人間の一生のストーリーを本気で語る気になったといえるであろう。あるいは、発達のストーリーが「時間の軸」をたしかに持ったといえるであろう。心理学は生涯発達の視点をもつことになったのである（それがどのようなものであるかについては高橋・波多野, 1990で詳しく検討した）。

(2) 発達の特徴

そうはいっても中高年の心理学はまだ歴史が浅く、豊かなデータを提供するまでには至っていない。が、中高年者をも視野に入れて発達を考えてみた時、発達のストーリーには少なくとも次のような点が

しっかり含まれる必要があるといえる。

1. 人間は死に至るまで発達する。

われわれの日常生活での体験はたしかにそれを示している。加齢とともにある種の有能さを増す例を捜したらきりがないであろう。Baltesらは、いわゆる知能が一般に考えられているように加齢によって一律に衰えるばかりではないことを主張し、「知恵 (wisdom)」(人生の重要だがしかし不確かなできごとに対するよい判断能力) という概念を使って、加齢につれてヒトがさらに発達することを具体的に検討している (e. g., Baltes, 1986 ; Baltes & Baltes, 1990)。また、熟達化 (expertise) という概念を用いて発達をみてみれば、「時間は力である」という例はたくさんある (e. g., Leve, 1988)。

2. 変化の可能性がおおいにある。

「人生」という時間でみると人間の変化の可能性の大きさにはあらためて驚かされる。ヒトの発達ではとりかえしがつかないことはないのではないかとさえ思われるほど、さまざまな時期に変化する。変化の契機は自ら好んでの場合もあるが、戦争や時代の変化、貧困など本人が予想もしなかった外的な場合もある。しかし、それをくぐりながらそれぞれに変化していく人間を示す例は多い (e. g., Elder, 1974 ; 藤永ほか, 1987 ; McLoyd & Flanagan, 1990)。長い時間でみれば、変化を繰り返しているのが人間の発達だということがより明かである。

3. 個人差が大きい。

しかもその変化が人によっておおいに異なることも、生涯という時間の幅で考えるとたしかに気付く。学校などの社会的制度の硬い枠で縛られている時期とは違って、自らの選択が許される度合いが大きい中高年者、特に高齢者では、人間が実にさまざまであることがよくわかる。

このような3点はことさらに生涯発達などといわなくてもこれまでも自明のことであったといえなくもないが、これまでは単にスローガンでしかなく、実際に研究や教育で活かされていたとはいえない。その証拠には、暗黙のうちにであれ、「20歳前後で発達が終わり、以後は衰退する」というストーリーで発達は考えられ、教育がなされてきた。たとえば、青年や成年前期の人々の特徴である“早く、沢山できる”という生産性第一の価値が発達の目標として採用され、それができにくい子どもは未成熟者として、また、中高年者は衰えた人として扱われてきた。あるいは、「三つ子の魂百まで」という比喩に代表されるように乳幼児期が過度に重視されてきているし、そしてまた、個人差が許容される範囲はきわめて狭い。したがって、この発達の3つの基本的な特徴をしっかり含む発達のストーリーは、これとまでとはかなり異なるものになるはずである。

そこで、それが具体的にはどのようなものかを対人関係の研究に例をとってみよう。対人関係といってもさまざまなものが考えられるが、以下では「対人関係のごく中心的な部分を占める関係、すなわち、他の人と情緒的に結びつきたいという要求を満たすような対人関係」を問題にしよう。それは、このような対人関係が人間の一生のストーリーではたいへん重要な役割を果たすからである。

2. 対人関係の生涯発達

(1) どのようなモデルで考えるか

生涯発達という視点をもって対人関係を問題にする時には、乳児からの一生の対人関係を記述できるような理論的なモデルを考えなければならない。それにはまず、「他の人と情緒的に結びつきたいという要求を満たすような対人関係」をどのように操作的に定義するかが重要である。

愛情要求についての先行研究の主流は、もっぱら乳幼児期の母親への「依存的な愛情」を愛着 (attachment) という用語のもとに扱ってきた Bowlby 派 (1969 ; 1973 ; 1980 ; Ainsworth, 1989) である。けれども、愛情関係の発達の一生を見渡すには、「弱く無知な乳児と強く賢い母親」とのいわば“非対称的な関係”に狭く限定してしまった愛着 (Hinde, 1982) だけでは充分ではない。別の概念化をしなければ生涯発達はとらえられない。これにはいくつかの試みがある。

筆者は最終的には愛情関係 (affective relationships) という用語を使うことになったのだが (この経緯については Takahashi, 1990 で詳しく述べた), Affective Structure Model を提案してきた。愛着は乳幼児にもおとなにもありはするが, さらに愛情要求では愛着のように「愛情を人に求める」ばかりではなく, 「愛情を人と分かち合い」, さらに「愛情を人に与える」ことも重要であろう。これらのすべてを含めて愛情要求と呼んで, 一生をとおしての愛情要求の満たし方や内容を検討することをしてきたのである。より具体的には a. 愛情の要求を向ける相手を数人持っている, b. 愛情の要求の表現の仕方がさまざま, 相手や状況に応じて使いわけている, c. 数人の愛情の対象のそれぞれが自分にとってどのような機能を果たすかをはっきり区別し, それぞれの対象に役割を与え, 「愛情構造」と呼んでもよいまとまった枠組みを持っている, d. 愛情要求の強度は対象によってそれぞれ異なっている, という成人の愛情関係の状態の記述をもとに, 愛情関係を4つの要因 (愛情要求を向ける対象, 愛情要求の対象が持つ機能, 愛情要求の行動様式, 愛情要求の強度) で記述することにした (Takahashi, 1974)。そして, 青年以上の被験者のための質問紙と, 質問紙調査が難しい小学生までの子どもと高齢者のためには図版による測定具を, 作成した。こうして, 理論的には同じ枠組みで乳児からおとなまでの愛情関係が測定されるようになった。

Kahn & Antonucci (1980; Antonucci, 1985) は乳児の養育者への愛着を人間関係の始めと認めたいうえで, 特に中高年者を対象に「親しく感じ, 好きで大切な人々からなる」対人関係を記述する Convoy Model を提案している。自分を中心にして3重の同心円を考え, 最も自分にとって大切な人, 次に大切な人という具合にして, 少なくとも3段階に重要さが区別されたサポートシステムを考えているのである。Levitt ら (1991) はこれを幼児や小学生に用いて有効だとしている。筆者は幼児から成人までに用いてみたが, 広い年齢層に使えるようである。

社会学に背景を持つ Lewis (1982) が提案しているのは, Social Network Model である。社会に生まれる人間は誕生から社会的なネットワークの中で生活するという事実から出発して, 人が果たすさまざまな機能 (養護, 教育, 遊びなど多数) をだれが果しているかについてのマトリックスを描いて, いわば social map を描こうとするものである。

このように, 生涯にわたる対人関係を記述するには, いずれかの時期だけに特有というのではなく, しかも, 人間にとって重要であるという対人関係を概念化する必要があり, また, 多種多様な人々との関係を同時に持っているという現実をうまく記述できるものでなければならない。

(2) 愛情要求をおとなも持つか

発達を依存から自立への変化と考え, 自立に最高の価値をおいていた西洋流男性中心文化での発達のストーリーには, 愛情を求める要求が生涯にわたって存在するという内容は入れられにくかった。彼らにとっては, 愛情を求めたりするのは, 子どもか, 女性か, 病人などの“弱者”のすることであった。Sarason & Sarason は1983年にフランスの Chateau de Bonas で開かれたワークショップでの発表論文をもとに1985年に “Social Support: Theory, Research, and Applications” (Sarason & Sarason, 1985) という本を造ったが, その序文で臨床関係の研究は例外であったが, 研究者が人間関係の positive side に注目したのはごく最近だと書いている。おとなの愛情要求がどのようなものかについての研究では次のような変化が目される。

第一は, 対人関係の機能を明らかにすることで, おとなにおいても心理的支えとしての対人関係が重要だとする研究が増えてきたことである。social support network という概念を用いた研究は, 大変多くなっている (e. g., Gottlieb, 1983; Sarason & Sarason, 1985; Bell, 1989)。初期には, 人が病的な状態 (たとえばうつ状態) にならぬように支える人間関係の, いわゆる buffering effect (Cohen & Wills, 1985) を支持する研究が多かったが, 最近ではだれしもが体験する可能性の高い, 子どもから高齢者までのさまざまな life-events (入学, 転居, 出産, 離婚, 死別など) を対人関係が支えているこ

とを示す研究が増えている。

第二に、実際に広い年齢層のデータがそろいつつある。たとえば、Antonucciら (Antonucci & Akiyama, 1987) は中高年のデータを分析して、高齢者でもネットワークの人数が減ったりしていないことを示しているし、筆者もさまざまな年齢について検討しているが、どこかの年齢で愛情要求の程度が極端に減少したりすることはなく、それぞれの時期で重要とされる愛情の対象は変るものの、愛情要求の満たしかたについては共通性がみられることを確かめている。

第三に注目されるのは、Bowlby-Ainsworth派の最近の変化である。生涯発達を考えるとという時代のあおりをもっとも興味ぶかい人たちでうけているのは、いわゆるこの“正統派”の愛着の研究者たちであろう。Bowlby理論はStrange Situation Procedureを考案したAinsworthらによって生後12か月前後から18か月までの乳児の母親に対する愛着研究に具体化された。長くこの派の研究者たちは、乳児期に安定した愛着があれば後の発達は巧くいくという単純なストーリーしか持たなかった。したがって、彼らはStrange Situation Procedure以外の愛着の測定具を必要としなかった。しかし、生涯発達の波は確実に彼らにも押し寄せ、1985年頃から乳児期以後はどうなるのかを語り始めた。それは一つは、幼児やおとなの愛着を測ること (e.g., Main, Kaplan, & Cassidy, 1985) に現れた。そしてさらに、Bowlbyの理論の中から“inner working model”があらためて取り出されたことである。乳児期の安定した愛着は、表象や記憶の能力の成長にともなってinner working modelを形成する。そして、これが相手の行動を予測したり解釈したり、あるいは、自身の適当な行動を示唆したりする作業モデルとして働いて、人の有能さや精神的健康を支えるとして (e.g., Bretherton, 1990; Sroufe, 1988), 乳児期の愛着と後の発達との関連を説明し始めたのである。

(3) 対人関係の発達の道は一本道か

長く、対人関係の発達のストーリーの主流はたとえばEriksonに代表されるepigeneticな理論で、それでは発達是一本道だとしてきた。つまり、人間関係の基礎は母親との関係でできあがり、それをもとに他の家族との関係ができ、次に家族以外の人との関係ができていくという具合に、発達が“単線”で進むとしてきたのである。この説の特徴は後の発達の基礎として母子関係を重視することである。Bowlby-Ainsworth派はその典型である。彼らが幼児やおとなの愛着を考え始めているといっても、Mainらの愛着の測定は常に母子関係の質を問題にしている。また、最近是不安定な愛着で形成されたinner working modelが修復可能であるとしてもはいる (Bretherton, 1990) が、これもあくまでも家族関係の変化に原因が帰せられていて、母親決定論的な色彩はいぜんとして濃い。inner working modelがいかなるものかはまだ彼らによっては明かにされてはいない。現在のいくつかの研究 (e.g., Kobak & Sceery, 1988; Collins & Read, 1990) のようなパーソナリティテストを寄せ集めたような方法では満足できないとは彼らも考えていて、その具体的な方法が検討されている (Sroufe, personal communication, 1991, 4)。

Social Networkを問題にしている人たちの多くは、Social Networkを独立変数として扱い、それ自体が変化することについてはいくつかの例外的な研究を除いて関心がない。が、おそらく発達は複線で進むと考えているであろう。たとえば、Lewisは対人行動は社会システムを反映するものだと考え、数人の人々が同時に子どもに大切な人として係わるとしている。したがって、母親は乳児にとって重要ではあるがデイケアの場合には母親以外の人母親に代ることがあるし、代れると考えている (Lewis, 1982)。あるいは、彼らは子を虐待するなど母子関係が悪くとも、その影響が仲間関係には及ばないという証拠を示して (Lewis & Schaeffer, 1981) epigenetic理論に異を唱えている。彼はsocial network modelは発達のモデルではないとしているが、乳児はごく初期から養育者との間をつくるlike-motherと、生存の確保という点からは生得的だとも考えられるlike-child(me)という対人関係の2種の原型を持っているとも述べている (Lewis & Brooks-Gunn, 1979)。

筆者のストーリーも Lewis に近い。実際、Strange Situation Procedure で母親への愛着が安定していると判定された乳児では母親と同時に父親や祖母など少なくとも数人を愛情の対象としてすでに持っているし、2歳児では仲間を含めてさらに多数の親しい人間関係が母親によって報告された。

(4) 対人関係の個人差

対人関係の個人差が問題にされることはまだ少ない。Ainsworth らによるいわゆる A, B, C, D の分類は代表的なものとして注目されてきた。最近、社会心理学の Shaver (Hazan & Shaver, 1987) はこの A, B, C のタイプをおとなが他人とかかわる際に、親しみ深いか(B)、不安が多いか(C)、疎であるか(A) という関係の持ち方に単純にあてはめて、Adult Attachment Style が測れるとした。測定の簡便さもあって一部で流行っているが、これがいわゆる愛着を測っているとは言い難いであろう。一方、Social Network を扱う研究者は network に含まれる人数の多さを個人差の指標とするにとどまっている。

筆者の測定具は個人差を描きだすところにも特徴がある。愛情構造の中でどの対象が優勢かをみると、中心的な対象がだれかによって愛情行動の個人差が認められる。この個人差は早くから現れ、大きくは、母親や家族を相対的に重要だとする家族型と、仲間を相対的に重要だと答える仲間型とに区別された。そして、5, 6歳児では10~15%の仲間型がみられた。この二つの群は青年でも、成人でも、高齢者でもみられる。そして、この二つの群の人々は人間関係について異なるストーリーあるいは“理論”を持っているらしいという資料が集りつつある (e.g., 松井, 1989; 鈴木, 1991; Takahashi, 1989; Takahashi, Nagata, & Suzuki, 1991; Takahashi & Majima, 1991)。

3. 生涯発達論の持つ教育的示唆

ここ数年、対人関係の発達ストーリーは大きく変わってきたといってよいであろう。それは、家庭教育、成人教育、教育的治療、介護、福祉などに少なくとも次のような提案をしていると思われる。

1. 発達を「三つ子の魂百まで」という比喩で語るべきではない。

なぜこの比喩が不適切かは他で述べた (高橋, 波多野, 1990) ので、ここでは繰返さない。この比喩は、だから母親が発達では重要なのだという主張とセットで使われるのが常である。この比喩が若い母親を脅かし、あるいは行政に便利に使われていることはいまさら指摘するまでもないであろう。

2. 発達では、なんかいつでも取返しがきく。

家庭教育や学校教育など子どもの教育にかかわる多くの親、教師、教育行政は発達を「取返しがきかない」というストーリーで考えていることが多い。ところが実際には、変化の機会が多く、変化を繰返しているのである。たとえば、母子関係だけが人間関係の基礎とする考え方は揺らいでいる。

3. 個人差を具体的に認めなくてはならない。

発達の個人差がもっとも認められ難いのは、社会的弱者においてである。たとえば、子どもは教育という鑄型にはめられ、高齢者は衰えていく者として個人としての尊厳を奪われ、それが学校の管理化や福祉の「在宅介護」が幸せですよという一様化となる。けれども、たとえば対人関係のデータはすべての子どもが入園とともに一斉に仲間に関心を持ち、関係を発達させると期待するのも、高齢者が子どもや孫とくらすのを一様に幸せだとするのも勝手な押しつけだと、示唆している。

4. 人に支えられ、支えることの大切さ。

対人関係の研究は人が支え合って生きていることを、今、はっきり認め始めた。自己、自立、精神的健康が「人との愛情に係わる」という一見反対ともいえるものに、支えられていることが実証的に示されてきた意味は大きい。女性のほうが一般に大きな social network を持ち、危機をそれに支えられて過ごすのが上手なこと、高齢者では男性に孤独感がより強いこと、などからみると、「人との愛情に係

わる」のは自然なのだ」と男の子にも、男性にももっと伝える必要があるかもしれない。さらに、誰かを支えることが喜びにつながることももっと注目されていい。けれども、大切なことは、だれもが家庭を必要としているなどと短絡的に考えないことである。子どもを含めて、その人の対人関係の内容を尊重しながらの、援助や調整をするべきものである。

文 献

- Ainsworth, M. D. S. (1989). Attachments beyond infancy. *American Psychologist*, 44, 709-716.
- Antonucci, T. C. (1985). Theoretical advances, recent findings and pressing issues. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (Eds.), *Social support : Theory, research and applications* (pp.21-37). Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers.
- Antonucci, T. C. & Akiyama, H. (1987). An examination of sex differences in social support among older men and women. *Sex Role*, 17, 737-749.
- Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23, 611-626.
- Baltes, P. B. & Baltes, M. M. (1990). Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes (Eds.), *Successful aging : Perspectives from the behavioral sciences* (pp.1-34), Cambridge : Cambridge University Press.
- Belle, D. (Ed.). (1989). *Children's social network and social support*. New York: Wiley.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books. (2nd rev. ed. 1982)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss*. Vol. 2. Separation. New York : Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss*. Vol. 3. Loss, sadness and depression. New York : Basic Books.
- Bretherton, I. (1990). Open communication and internal working models : Their role in the development of attachment relationships. In R. Dienstbier & R. A. Thompson (Eds.), *Nebraska symposium on motivation 1988 Vol 36*. (pp. 57-113). Lincoln : University of Nebraska Press.
- Cohen, S. & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-317.
- Collins, N. J. & Read, S. (1990). Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.
- Elder, G. H. (1974). 本田時雄ほか (訳) 「大恐慌の子どもたち」明石書店 (1986).
- 藤永保ほか (1987). 「人間発達と初期環境」有斐閣.
- Gottlieb, B. H. (1983). Social support as a focus for integrative research in psychology. *American Psychologist*, 38, 278-287.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. (1980). Convoys over the life course: Attachment, roles and social support. In P. B. Baltes & O. B. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior*, Vol 3 (pp.253-286). New York : Academic Press.
- Kobak, R. R. & Sceery, A. (1988). Attachment in late adolescence : Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, 59, 135-146.
- Lave, J. (1988). *Cognition in practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Levitt, M. J., Guacci, N. & Ordoqui, M. D. (1991). Social networks in childhood and early adolescence: Structure and function. Paper presented at SRCD, Seattle, April.
- Lewis, M. (1982). The social network model. In T. M. Field et al. (Eds.), *Review of human development* (pp. 180-214). New York : Wiley.
- Lewis, M. & Brooks-Gunn, J. (1979). *Social cognition and the acquisition of self*. New York : Plenum.
- Lewis, M. & Schaeffer, S. (1981). Peer behavior and mother-infant interaction in maltreated children. In M. Lewis & L. Rosenblum (Eds.), *The uncommon child : The genesis of behavior* Vol. 3. (pp. 193-223). New York: Plenum.
- Main, M., Kaplan, K. & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood : A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- 松井澄子 (1989). 対人関係が物語理解に及ぼす影響. 聖心女子大学卒業論文.
- McLoyd, V. C. & Flanagan, C. A. (1990). *Economic stress : effects on family life and child development*. San Francisco : Jossey-Bass.
- Sarason, I. G. & Sarason, B. R. (Eds.) (1985). *Social support : Theory, research and applications*. Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers.
- Sroufe, A. L. (1988). The role of infant-caregiver attachment in development. In J. Belsky & T. Nezworsky (Eds.), *Clinical implications of attachment* (pp. 18-38). Hillsdale : Erlbaum.
- 鈴木美夏 (1991). 幼児の対人関係の枠組みと問題解決場面での協同作業. 聖心女子大卒業論文.
- Takahashi, K. (1974). Development of dependency among female adolescents and young adults. *Japanese Psychological Research*, 16, 179-185.
- Takahashi, K. (1989). Personal history differences between family type and agemate type affective relationships among female college students. Paper presented at SRCD, Kansas city, April.
- 高橋恵子 (1990). 発達心理学の新しい展開. 無藤隆ほか (編)「発達心理学入門Ⅱ」(pp. 207-214) 東大出版会.
- Takahashi, K. (1990). Affective relationships and their lifelong development. In P. B. Baltes et al. (Eds.) *Life-span development and behavior* Vol.10. (pp. 1-27). Hillsdale : Erlbaum.
- 高橋恵子・波多野諠余夫 (1990). 「生涯発達心理学」. 岩波新書.
- Takahashi, K., Nagata, C., & Suzuki, M. (1990). Task performances in joint problem situation of 4-year-old agemate-dominant and mother-dominant type children. Paper presented at Waterloo Conference on Child Development, Waterloo, Canada, May.
- Takahashi, K. & Majima, N. (1991). Transition from home to college dormitory : The role of pre-established affective relationships in adjustment to new life. Paper presented at SRCD. Seattle, April.